2『ヘーヴァジュラ・タントラ』

聖と性の饗宴

森　雅秀

一　成就者

インドで密教が流行していた時代には、数多くの在野の修行者たちがいた。彼らは世俗の人々と交わりながら暮らし、単独で、あるいは弟子たちとともに悟りを求めて修行した。この場合の悟りとは、涅槃や解脱よりもむしろ、空中を飛翔することや、はるかかなたを見通せること、人々を思いのままに操り、場合によっては呪い殺すといった、超自然的な能力を指すこ

とが多い。これらの能力は「成就すること」を意味する「シッディ」（悉地）と呼ばれ、彼ら行者たちも「成就したもの」すなわち「シッダ」と総称された。

シッダたちの行動や生涯を伝える文献に「成就者伝」がある。なかでも有名な『八十四成就者伝』には、タイトルどおり、八四人のシッダたちの簡潔な伝記が収められている。本書に含まれるシッダのひとりカーンハ（クリシュナチャーリン）に関する記述を簡単に紹介しよう。

カーンハはソーマプリー（現在のバングラデシュ、パハルプール）の書記カーストの出身で、ジャーランダラという人物に師事した。もともと、カーンハはソーマプリー僧院の比丘で、師僧から灌頂、すなわち密教の入門儀礼を受け、ヘーヴァジュラ尊に関する教えにしたがって一二年間にわたって修行した。その結果、彼にはさまざまな「超能力」が身に付いた。

あるときは、世界が震動する中で、ヘーヴァジュラとその眷属が出現し、またあるときは石の中に足が沈み込んだり、空中歩行することができた。さらには天空に傘蓋と太鼓が出現し、太鼓は自然に音を発した。これらの能力を会得したカーンハはシッディを得たと思い、ランカー島まで海の上を歩行しようとしたが、自分の力への慢心が生じたとたんに海に沈んでしまう。師ジャーランダラが空中に現れ、別の地にいる彼の弟子のひとりに師事するように命じる。

ジャーランダラがすすめた弟子は織物職人で、ようやくそこにたどり着いたカーンハとその弟子に対して、この人物は奇妙な修行を命じる。彼はカーンハを墓場に連れていくと、死体の

『八十四成就者伝』が伝えるカーンハ、すなわちクリシュナチャーリンは、インドの密教史上、さまざまな伝承の中に登場する行者の名で、ひとりではなく同一の名称をもつ複数の人物がいたと考えられている。しかし、クリシュナチャーリンの名は『ヘーヴァジュラ・タントラ』に対する重要な注釈書のひとつ『ヨーガラトナマーラー』（ヨーガの宝環）の著者として知られ、ヘーヴァジュラの教えを受けたこの伝記の主人公も、その同一人物と見なされている。

この伝記にはさまざまな修行法が登場する。はじめに彼が身につけた超能力のうち、ヘーヴァジュラとその眷属が出現するのは、密教の実践法としてはめずらしいものではない。特定の尊格を瞑想の中で出現させる方法は、初期や中期の密教経典でもしばしば見られる。しかし、成就者伝はこのような仏の出現を「劣ったシッディ」と位置づけ、行者に慢心を起こすものと戒めている。そして、それよりもすぐれた方法として、織物職人が示した死体の肉の摂取、大便からできた丸薬の服用、そしてガナチャクラと呼ばれる饗宴をあげている。これらに拒否反応を示したカーンハには、「般若と方便が別になったもの」という批判を加えている。

死に至るエピソードには「ダーキニー」と呼ばれる女性が登場する。彼女はカーンハのために妙薬を取りに虚空を飛来して帰ってくるような特殊な能力を備えているが、カーンハの重要なパートナーであった。ダーキニーとは後期密教のさまざまな経典に登場する女性の修行者や神々の総称で、チベットでは「カンドーマ」（虚空を行く者）と翻訳される。

単に仏を瞑想し、その姿を見ることだけの修行を低レベルのものと見なし、猥雑で場合によっては反社会的な修行法をそれよりもすぐれた実践と位置づけるこの物語は、われわれの目には奇異にしか映らない。しかし、このような方法を実際に説き、それによって「悟り」を求めた人々が、インド後期密教の時代にはたしかに存在した。そして、彼らにとって最も重要な経典のひとつが『ヘーヴァジュラ・タントラ』であった。

二 『ヘーヴァジュラ・タントラ』とは

1 ヘーヴァジュラ尊

『ヘーヴァジュラ・タントラ』はインド後期密教の母タントラ系の代表的な経典である。ヘーヴァジュラとは尊格の名称で、この経典の主役として、聴衆である菩薩や女尊たちにむかって教えを説く。ヘーヴァジュラという名称は「ヘー」と「ヴァジュラ」の二つの部分からなり、前半の「ヘー」は呼びかけの言葉、後半は「金剛」の意味である。そのため「呼金剛」や「喜金剛」と漢訳されることもあるが、一般にはそのままカタカナで呼ぶ。経典の中では「ヘー」は大悲を、「ヴァジュラ」は般若を表すという解釈が示されているが、これは後から加えられた教理的な意味にすぎない。

「ヘーヴァジュラ」という名称は「ヘールカヴァジュラ」の略称と見た方が適切である。ヘールカとは母タントラの先駆経典である『サマーヨーガ・タントラ』などから登場する忿怒尊で、のちには母タントラ系の主要尊の総称となる。サンヴァラ、ブッダカパーラ、マハーマーヤーなどは、いずれもヘールカとよばれる。ヘーヴァジュラも代表的なヘールカである。

尊格の観想法を説く成就法文献には、ヘールカに関する観想法が含まれるが、その場合のヘールカは、総称ではなく本来の狭義の名称である。それによれば、ヘールカは一面二臂をそなえ、右手に金剛杵、左手にカパーラ（頭蓋骨の杯）を持ち、さらに左手にはカトヴァーンガ（髑髏を先端に付けた杖）をかかえる。足の下には死体を踏みつけているが、右足をあげ、左足のみで立ち、舞踊のポーズを取る。髪の毛は炎のように逆立ち、三眼、忿怒の相をもつ。額には自身の部族主である阿閦（あしゅく）の小像をいただくこともある。肩からは人間の生首をつないだ環をかけ、身体には灰を塗ることも、重要な特徴としてあげられている。

このようなイメージはヒンドゥー教の神であるシヴァと重なり、仏教側がそれを模倣していることは明らかである。かつて密教が栄えた地域からは、かなりの数のヘールカ像が出土しているが、そこに見られる図像的な特徴は、成就法文献などの記述にほぼ忠実である（図1）。

ヘーヴァジュラはヘールカのイメージを継承しつつ、さらに複雑なものへと発展させている。ヘーヴァジュラを主尊とするマンダラを説く一二世紀の文献には、一面二臂、一面四臂、三面

1　ヘールカ像　インド／バングラデシュ国立博物館蔵

六臂、一面一六臂の四種のヘーヴァジュラが説かれる。このうち、最後の一面一六臂のタイプが、ヘーヴァジュラの代表的なイメージとして定着する（図2）。

一六本の腕にはすべて血があふれたカパーラを持ち、右手には動物、左手にはヒンドゥー教の神々をそこに入れる。足は四本に増え、舞踊のポーズを取る二本以外は展右（左膝を曲げ、右足を反対側に伸ばす姿勢）である。

このようなイメージはチベットのタンカや白描図でしばしば見ることができるが、インドでも若干の出土例がある（図3）。なお、ヘーヴァジュラは明妃を抱いた姿をとり、明妃の名称は上記の四つのタイプでそれぞれ異なる。一面二臂と一面一六臂の場合はナイラートミヤー（無我女）、一面四臂はヴァジュラヴァーラーヒー、三面六臂はヴァジュラシュリンカラーとなる。

2 経典の概要

『ヘーヴァジュラ・タントラ』にはサンスクリット語の原典、チベット語訳、漢訳テキストのいずれもが現存している。経典名はサンスクリット写本には含まれないようで、チベット語訳テキストの冒頭に「ヘーヴァジュラ・タントラ」の名称が現れ、さらに奥付には「三二儀軌から取りだした二つの儀軌からなる吉祥ヘーヴァジュラ・ダーキニージャーラサンヴァラであ

2　ヘーヴァジュラ　ラダック／サスポール石窟壁画

るタントラ王」という名称もある。

「ダーキニージャーラ」（ダーキニーの網）というのは、初期の母タントラ系の文献の名称としてしばしば見られるもので、ダーキニーたちのグループを指す。これに続く「サンヴァラ」も「サンヴァラ・タントラ」の名で知られるように、母タントラ経典の中で、この名称をもつものが一群を形成している。ただし、サンスクリット写本には、これらに相当する経典名が含まれないことから、もともと『ヘーヴァジュラ・タントラ』の正式名称であったかは明らかではない。

経典名として重要なのは、むしろ前半の「三二儀軌から取り出した二つの儀軌」である。『ヘーヴァジュラ・タントラ』がもともと三二儀軌で構成されていたことは、『ヘーヴァジュラ・タントラ』に対する各種の注釈者や、チベットの碩学プトゥンの著作でも言及され、広く知られていた。チベットでは『ヘーヴァジュラ・タントラ』という経典名よりも、むしろ「二儀軌」という略称で、この経典は呼ばれることが一般的である。

しかし、三二儀軌全体はもちろんのこと、現存するテキストよりも多くの儀軌を含むテキストも、あるいは異なる構成の異本も、現在のところ知られていない。しかも、三二儀軌に言及する注釈書では、全体は五〇万頌と紹介されているのに対し、プトゥンは一〇万頌と呼んで、全体量が一致しない。さらには、現行のテキストの二儀軌には約七五〇頌しか含まれないので、

3　インド出土の明妃を抱いたヘーヴァジュラ像　カルカッタ／インド博物館蔵

かりに少ない方の一〇万頌としても、失われた残りの三〇の各儀軌は、現存する部分よりもはるかに多くの偈頌を含んでいなければならない。

タントラ経典のみならず、大乗仏教以来、実際に流布している経典は、神話的な時代にその数十倍、数百倍の量をもっていたものから抄出したものであると、しばしば強調される。そのすべてがフィクションとはいい切れないが、幻の浩瀚な仏説があるという信仰は、現行のテキストに権威を与えるための常套手段だったのであろう。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』の場合、この名称とともに引用文が他の文献で紹介されていながら、現行の二儀軌の中には同一パッセージが含まれないというケースがある。『ヘーヴァジュラ・タントラ』の名称をもちながら、すでに失われたテキストが存在していたことが予想されるのである。しかし、それが首尾一貫した内容をもつ三二儀軌で構成されていた可能性は低いであろう。むしろ『ヘーヴァジュラ・タントラ』の内容から判断して、この経典が成立した背景には、雑多な情報源が存在していたことが予想される。

そして、それは必ずしも母タントラのジャンルに限定されない。あるものは初期密教の時代の実践法や現世利益的な修法(しゅほう)であったり、あるものは『秘密集会タントラ』などの父タントラと共通の要素をもった文献であったり、さらにはヒンドゥー教の神々や哲学の体系、あるいはそのレベルにまで整理されていない民間信仰や俗信までもが想定される。

現存の二儀軌のうち、第一儀軌は「金剛蔵の現等覚（げんとうがく）」という名称をもち、一一章で構成され、第二儀軌は「大いなるタントラ王の幻」で、一二章からなる。それぞれの章の内容を見ると、ひとつの章の中にさまざまな内容が詰め込まれ、統一性を有していない場合がしばしばある。また逆に、連続する内容でありながら、その途中でひとつの章が終わり、次の章に続く場合もある。現在の偈頌だけでは、ほとんど意味を読みとれない部分も多く見られる。

全体を通して、未整理、未消化な印象を与え、広範かつ異質な内容を十分咀嚼できないまま、ひとつの経典として、無理やり仕立て上げられたというのが妥当なところであろう。経典の冒頭には「かくのごとく私は聞いた」という常套的な語がおかれているが、終結部分は第一儀軌、第二儀軌いずれも唐突な終わり方で、何ら総括的な内容は現れない。

二儀軌二三章がどのような順序で形成されたかも明らかではない。この中で最も整備された内容をもつのは、冒頭の第一儀軌第一章である。ここでは世尊が説法の聴衆の代表である金剛蔵菩薩に対して、金剛薩埵とヘーヴァジュラという名称の由来、タントラを説く理由、人間の身体にある三二の脈管（みゃくかん）（ナーディー）、四つのチャクラの紹介、そして経典の中で説かれるさまざまな主題が、いずれも四つの構成要素からなることなどが説かれている。おそらくここは、経典の中でも最も成立が遅れる箇所で、すでに残りの部分がある程度確立してから、その内容を整理し、要点を提示するような目的で準備されたのであろう。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』には後期密教のタントラ経典としてはめずらしく、漢訳が残されている。宋代の法護による翻訳で、年代は一〇世紀後半である。漢訳の経題は「仏説大悲空智金剛大教王儀軌経」で、サンスクリット、チベットのいずれのテキストの標題とも一致しない。割注の形で「大幻化普通儀軌三十一分中略出二無我法」という経題も加えられているが、これもチベット訳の奥付にあった名称とは微妙に異なる。

内容的には梵蔵漢はいずれもほぼ同一の内容をもっているが、漢訳はしばしば難解な訳語を用いたり、意図的に内容を省略したりすることがある。このような特徴は『秘密集会タントラ』の漢訳テキストにも認められるが、それよりもさらに「過激」な内容をもつ『ヘーヴァジュラ・タントラ』では、その傾向はより顕著となっている。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』のテキストと翻訳は、一九五六年にスネルグローヴによって発表されている。校訂上の問題は、発表当初からいろいろ指摘されているが、同書が母タントラや後期密教の研究のみならず、欧米における密教研究に大きな寄与をなしたことは事実である。その後、ファローとメノンによってあらたなエディションと翻訳、そして注釈書である『ヨーガラトナマーラー』から、関連箇所の翻訳を加えたものが発表された。すでに述べたように、この注釈書はクリシュナチャーリンに帰せられ、スネルグローヴ本にもそのサンスクリット・テキストが含まれている。

わが国でも『ヘーヴァジュラ・タントラ』については、津田真一をはじめ、頼富本宏、野口圭也、島田茂樹、田中公明らによって研究が進められてきた。全体の和訳は発表されていないが、いくつかの重要な章や、部分的な和訳はある。

三　混沌とした実践

1　さまざまな儀礼

『ヘーヴァジュラ・タントラ』は女性のパートナーを得て行う性ヨーガや、行者の身体の中にあるとされる脈管やチャクラを用いた実践、あるいはピータと呼ばれる巡礼地とそこで行われる密儀などが有名であるが、経典を通読すると、いまだ体系化されていないさまざまな実践法が、混沌としていることの方が印象に残る。このような実践法のいくつかを、経典のはじめから順に取り上げてみよう。

第一儀軌第二章には「マントラ」という章名が与えられ、実際にマントラの列挙が主題となっているが、それらの多くは特定の修法と結びついている。『ヘーヴァジュラ・タントラ』のほとんどはシュローカと呼ばれる韻文で書かれているが、この章のみは散文で書かれ、残りの部分との成立時期の違いを予想させる。

第二章のはじめにあげられているのは、バリと呼ばれる儀礼のマントラである。バリは一日の特定の時間帯や、大きな儀式の開始時や終了時に行われる儀礼で、精霊や餓鬼などを慰撫するための施食を中心とする。続いて、大日如来などの五仏、ヘーヴァジュラ、ヨーギニーたちのマントラが列挙され、さらに結界、降伏、遮止、追放、離間、呪殺、鉤召などの修法のマントラがあげられている。降伏から後は相手に死や災いをもたらす黒魔術的な修法であることが目に付く。

つぎに請雨法と止雨法のマントラが儀礼の手順とあわせて示される。その方法は、インドの密教文献において、時代を問わず広く見られる雨乞いの儀礼で、この修法が密教行者にとって重要なものであったことがわかる。日本でも平安時代の密教僧は、しばしば勅命などによって請雨と止雨の修法を行っている。

第二章はさらに呪術的な儀礼のためのマントラがあげられる。すなわち、敵を撃退する法、諸天（ヒンドゥー教の神々）を撃退する法、敵を焼き殺す法、敵を吐瀉させる法、女性を誘惑する法、太陽と月を支配する法、紛失物を見つける法、そして最後に、象、虎、サイなどの動物を解き放すマントラが順に示される。最後のマントラは、これらの動物を使って敵を攻撃したり、自分の身を守ったりしたのであろう。

第一儀軌の最後の部分には、クルクッラーという女尊の成就法が説かれている。「フリーヒ」

という種子マントラから生み出され、身体の色は赤、四臂を備え、弓矢、青蓮華、鉤(かぎ)をそれらの手に持つ。この女尊の成就法を実修するだけで、三界はすべて自分の支配下になる。そのマントラを一〇万回唱えれば諸王が服従し、以下、唱える回数に応じて、庶民、夜叉、諸天などが意のままになるという。

クルクッラーはもともと敬愛法、すなわち、異性の心をとらえ、支配することを目的とした修法の主尊である。赤という身色は敬愛法固有の色として一般的であるし、手にする弓矢はキューピッドのそれと同じく、射られた相手に恋心を芽生えさせる。『ヘーヴァジュラ・タントラ』第一儀軌はこのクルクッラーの実践法を説いて終結するのであるが、これ以降のヘーヴァジュラ系の文献では、クルクッラーを主尊とするマンダラや、独立した儀礼文献などが生み出され、この尊の重要度が次第に増していく。

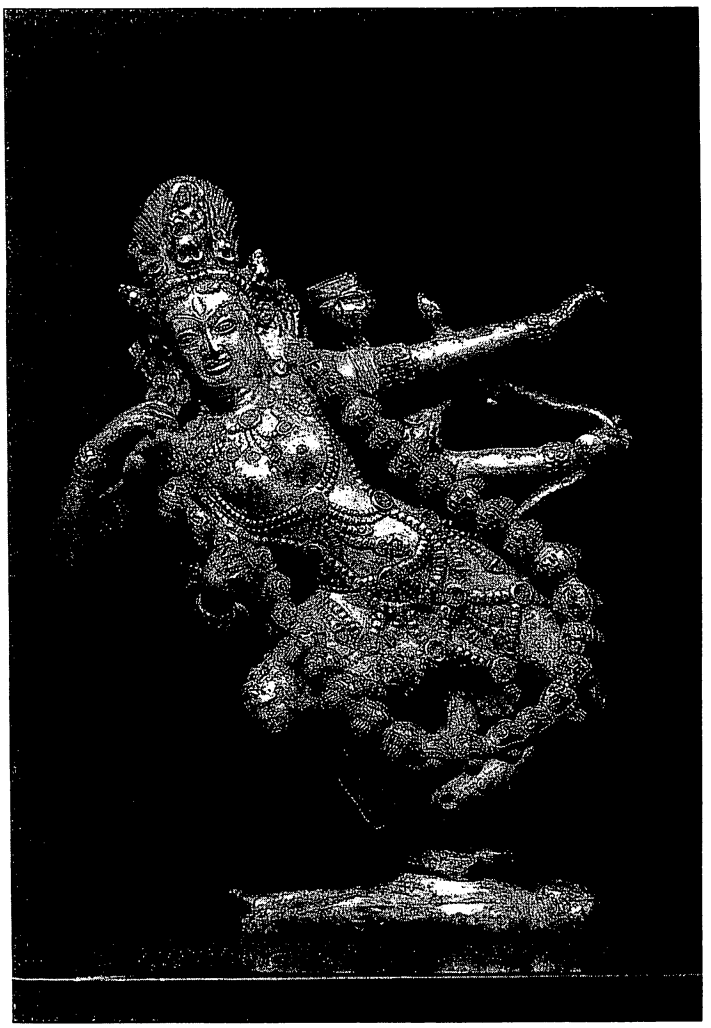
2 プラティシュターと護摩

『ヘーヴァジュラ・タントラ』第二儀軌はプラティシュターと呼ばれる儀礼の解説から始められる。プラティシュターの原義は「しっかり立てること」であるが、とくに尊像などを制作したときに安置し、開眼を行うための儀礼の名称として、インド世界では広く用いられている。仏像などの尊像に「魂を入れる」儀式と呼んでもよい。プラティシュターは尊像に対して行わ

れる他にも、経典のような「聖なる書物」や、寺院や仏塔のような「聖なる建物」もその対象となる。いずれも単なる物質ではなく「聖なるもの」だからである。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』のこの部分でも、金剛蔵菩薩の質問に対して、世尊が尊像や書物などのプラティシュターの方法を簡潔に述べる。すなわち、護摩を焚き、マンダラを描き、尊像の中に仏を招き入れ、花などの供物を供える。このようなプラティシュターの方法は、初期密教や中期密教の経典などにも見られ、『ヘーヴァジュラ・タントラ』成立の時代でも、その伝統にしたがっていたことがわかる。後世の文献では、弟子の入門儀礼である灌頂の影響を受けて、性ヨーガのプロセスを含む複雑なプラティシュターが説かれることもあるが、ここではまだそのような変化は見られない。

第二儀軌第一章の後半では、プラティシュターに続いて護摩の儀軌が説かれている。ただし、くわしい手順は述べられず、はじめに護摩の火炉の形態、大きさ、色、火の中に投ずる供物、火天アグニを招くためのマントラ、マンダラを描くために大地の女神に許可を求める偈頌、火天を喜ばせるマントラ、そして最後に火天に供える供物に応じたマントラが簡潔に述べられている。儀礼の次第というよりも、備忘録的な記述で、具体的な手順は別に定められていたのであろう。護摩の場合、修法の種類が時代や文献によって異なるが、ここでは息災・増益・調伏の三種で、初期密教から行われた最も基本的な修法があげられている。これに応じた火炉の特



4　クルクッラー像　チベット／北村コレクション

徴も、スタンダードなものである。

3 死体を利用する

第二儀軌第六章には、尊像を絵に描いた画布についての説明がある。女尊（ヨーギニーたち）からの質問に対して、ヘーヴァジュラが答える形をとり、その組み合わせがこれまでの世尊と金剛蔵とは異なる。そして、第一儀軌では見られなかったような密儀的な要素が現れる。ヘーヴァジュラが説く絵画とはつぎのようなものである。

絵の具の容器には頭蓋骨から作ったカパーラを用い、絵筆には死体の髪の毛を使う。画布も同じように髪の毛を編んで作る。ひと気のないところで、新月の前夜に、裸で、人骨で作った装身具のみを身につけ、酒を飲み、不浄なものを食べながら描く。このとき、画家の左側には、若く美しい女性（ムドラー、印女）がはべっている。そして、このような絵を描くのは「われわれの伝統に属する者のみ」でなければならないと警告している。

これに続く第七章も、同じようなトーンで、経典を筆写する方法がヘーヴァジュラ尊によって説かれる。貝葉（椰子の葉で作った筆写用の素材）に、最上の蜜から作ったインクと人骨のペンを用いて書き、携帯するときには髪の毛の中や腋の下に隠しておかなければならない。ふさわしくない者がこれを見ると、悟りが得られないばかりか、かえって害が大きいからであると

述べる。排他的で黒魔術を隠れて行う秘教の集団の姿が、ここからは浮かび上がる。

四　毒によって毒を制す

1　汝、殺すべし

死体からとった骨や毛髪を道具として、絵や書物を作ることは、『ヘーヴァジュラ・タントラ』に見られる死体への異常なまでのこだわりの一部にすぎない。

第一儀軌第七章には、絞首刑になった死体や、戦死者の屍肉をとって食べることが説かれている。カーンハの伝記の中で、織物職人によって命じられた行である。さらに『ヘーヴァジュラ・タントラ』のこの箇所では、「七生人」という特異な人物の肉も摂取するようすすめられる。七生人とは人間として七回生まれ変わり、善根を十分つんだ人物で、自分の身体をヨーガ行者に捧げることで、修行を完成させるのである。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』ではこのほかに第一儀軌第一一章にも七生人への言及がある。そこでは、このような人物は七つの影をもち、美しい声を発し、全身からは芳香を放っているという。また、注釈書によれば、ヨーガ行者たちがいんぎんに彼の身体を求めれば、みずから命を放棄するので、その死体から丸薬を作り、仲間たちに配分する。これを服用すると虚空を

自在に飛ぶ能力が身に付くという。

刑死者や戦死者の死体からも丸薬を作り、服用することで、最高のシッディが得られることも注釈書は述べている。このような死体には特別の力が宿っていると信じられていたのである。刑死場が特別な空間で、そこに生える植物が魔力をもっているという信仰は、ヨーロッパでも広く見られる（マンダラゲの花など）。刑死や戦死といった、いわば現世から強引に引き離された死は、何らかの力をそこに残すと信じられたのであろう。

しかし、死体の肉を食べることは、社会通念上、認められない行為であることは、密教の時代のインドでも何らかわりはない。また、七生人の自発的な死についても、それを殺害することは、反社会的な行為であるばかりではなく、仏教においても最も重い破戒に相当する。

そのため、『ヘーヴァジュラ・タントラ』は殺人を肯定するために「慈悲」という考え方を導入する。慈悲がなければシッディは得られないし、慈悲さえあれば、いかなる悪行であっても許されるのである。そして、行ってはならないこと、食べてはいけないもの、考えたり口に出したりしてはいけないこと、喜ばしきことも喜ばしくないことも、いずれも存在しない。このように考えてヨーガ行者は、上記の屍肉を摂取せよと説く。

2 慈悲と空と如来蔵

宗教的な行為が世俗の倫理を超越しているという思考法は、それほど特殊なことではない。仏教でも大乗経典には、慈悲を前提とする行為を全面的に肯定する教えがしばしば登場する。しかし、それはあくまでも一切智をそなえた仏にのみ与えられた一種の特権である。全知全能の存在だからこそ、われわれ衆生の思慮を超えていることが許されるのである。

一方、『ヘーヴァジュラ・タントラ』では仏ばかりではなくヨーガ行者にも、このような行為が許されている。その場合、根拠となっているのは慈悲ばかりではなく、否定されるものは何も存在しないと強調する考え方、すなわち空（くう）の思想である。

このような立場は、『ヘーヴァジュラ・タントラ』の第二儀軌でも一貫しているし、さらにエスカレートしているようにも見える。

第二儀軌第三章では、世界は実在と非実在をはじめとするあらゆる二元的な対立を超越した存在であり、しかもすべてに遍在し、幻の形態をとると説かれる。その上で、世尊は金剛蔵菩薩に対して、徹底的な破戒を自らの言葉で命じる。すなわち、「あらゆる生類を殺戮（さつりく）せよ、嘘言を吐け、与えられざるものを盗め、他人の妻と姦通せよ」。そして、ヨーギニー（女性のヨーガ行者）たちの質問に答える形で、五根、五境、五蘊（ごうん）、十八処などの、仏教の基本的概念で、世界を構成するさまざまな要素が、本来、生じたものではなく、真でも偽でもなく、あたかも水に映った月のごとしと説く。これは、大乗仏教における空の定義を受け継ぐもので、破戒の

正当化の根拠となっている。

さらに徹底化を図るように、世尊はあらゆる常識的な行為、あるいは仏教徒として守るべき行為にとらわれるなと説く。食べ物も飲み物も、与えられるものは何でも受け容れよ、物事の適不適を判断するな、沐浴や清めを行うな、マントラを唱えるな、苦行をするな、肉を食べよ、木や土で造った像を崇拝するな、あらゆる階層の人物に接触せよ、泥で身体を飾れ、墓場の花を髪に飾れ等々。

このような「悪行のすすめ」を説くためには、空の思想でも足りないと経典の作者は考えたのであろう。第二儀軌第四章では「毒によって毒を制す」という、以下のような理論が示される。

死をもたらすような毒があるとき、毒の性質を知る者は、他の毒をそれで消し去ることもできる。煩悩によって世界はとらわれているが、煩悩によってこそ世界は救済されるのである。世尊曰く、「強い毒を、その本性を知らずに普通の人間が飲めば、感覚を失ってしまうが、無知を捨て、真実を知る者は［毒によって］無知を滅することができる。同様に、解脱の方法を知り、ヘーヴァジュラの実践を行うものは、無明などにとらわれることも、無知などに縛られることもない」と。

この根拠となっているのは、あらゆる生類には仏となる性質が備わっているという如来蔵思

想であろう。われわれが輪廻にとらわれるのは、この仏としての性質が無知によって覆われているからにすぎないことが、このすぐ前の部分で説かれているし、後続の偈頌では、悟っていない者など本来存在せず、六道の世界にいるあらゆる生類、それは糞の中でうごめく蛆虫であっても、本来は永遠の至福に包まれているとまでいう。そして、仏陀というのは形をとって存在するものではなく、われわれの心こそが仏陀なのであると明言している。

五　性のオルギー

1　歌舞と飲食

タブーからの逸脱や、仏教徒として守るべき戒律の放棄としては、性行為を基本とするヨーガの実修こそあげられるべきであろう。このような性ヨーガは、父タントラ、母タントラの両者に現れるが、とくに『ヘーヴァジュラ・タントラ』は全体を通じて、その具体的な方法に関する記述が何度も現れる。

第一儀軌第六章は「実践の章」という名称をもち、つぎのような特異な行を説く。

ヨーガ行者は各種の装身具や衣装を身につけ、ヘールカのヨーガを実修する。それによって、ヨーガ行者はヘールカそのものとなり、さらに装身具や衣装を身につけることで、ヘールカ自

身に扮する。実践は夜に行われ、「木が一本だけ立っているところ、墓場、母の家、喜びの家、ひと気のない郊外」が選ばれる。そこで、金剛部から若い女性を選び、実践のパートナーとする。金剛部とは金剛の部族の意味で、仏教のすべての尊格を五ないし六のグループに分けたうちのひとつである。ヘールカやヘーヴァジュラはその主尊である。そして、この実践に関与する者たちも、仏の部族に配分されたのである。選ばれた若い女性は、美貌をそなえ、大きな青蓮華のような目をし、みずから灌頂を済ませている。この場合の灌頂とは、後述する生起次第（しょうきしだい）の瞑想によって、みずからが特定の尊格となっていることを表す。

ここではヘールカのパートナーにふさわしいナイラートミヤーなどの女尊が選ばれるのであろう。そして、そのためにはこの女性に「菩提心（ぼだいしん）」が植え付けられていなければならないが、それは男性の行者、すなわちヘールカの精液によって象徴される。

このような女性パートナーを得たヨーガ行者は、金剛の歌を歌い、舞を踊る。それによって、歓喜が生じ、それが解脱の因となるからである。『ヘーヴァジュラ・タントラ』の作者は、歌はマントラを唱えることで、舞は瞑想に等しいと述べる。そして、つねに歌舞をなし、薬草を食べ、水（あるいは特殊な液体）を飲めば、彼には死も老いもおとずれないと説く。

第二儀軌第七章の後半は、ヘーヴァジュラとなったヨーガ行者を中心とした饗宴の様子が説明される。

山の洞窟やひと気のないところで、死体や虎の皮などを用いて座をしつらえる。そこにヘーヴァジュラであるヨーガ行者が座り、まわりの八方には女性のヨーガ行者たちが坐る。これはヘーヴァジュラと八尊のダーキニーからなる九尊のマンダラを再現したものである。ここで彼らは特別な肉や薬草を食べ、酒を飲む。酒はヨーガ行者の弟子たちによって、カパーラに入れて献上される。

このような歌舞や飲食の儀礼は、秘密結社的な集団儀礼として行われたらしい。第一儀軌第七章には、儀礼に参加するための「チョーマー」と呼ばれる秘密のサイン（身ぶり）が説かれている。親指を見せるものに対して、「よく来た」ということを人差し指と中指の二本を立てて示す。そして、相手の左の親指を押すことで、認証したことを伝え、相手が薬指を示せば小指を示すなど、野球のブロックサインや手話のように交互にチョーマーを交わしていく。

また、会合に参加する者たちは、独特の隠語（saṃdhyābhāṣā 文字通りには「黄昏の言葉」）も用いた。これは第二儀軌第三章に列挙されている。「愛情」は酒、「力」は肉、「樟脳」は精液、「蓮華の器」はカパーラを表すことなどがあげられ、最後に「ボーラ」は金剛杵、「カッコーラ」は蓮華という対応も示されているが、この二つはさらに男性器と女性器を表す語でもある。このような隠語を正しく使わなければ、ヘーヴァジュラによって灌頂されたものであっても、そこで得た力を失ってしまい、あらゆる災厄に襲われると述べる。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』はこのような秘密の集会が、定期的に、かつ、いくつかの所定の場所で行われてことも伝えている。時期については、満月から新月に向かう八日目と一四日目の夜が指定され、場所として二四の地名があげられている。これらの地名はピータと呼ばれ、さらに一〇のグループにまとめられている。二四のピータの中にはオッディヤーナやシンドゥ、ナガラのような実在の聖地の名称も含まれるため、巡礼地として一種のネットワークを形成していたといわれることもあるが、なかには「大海の岸辺」や「池のほとり」のように、漠然とした地名も含まれている。

実際の集会のための拠点が複数存在し、ヨーガ行者たちがそこを遍歴したことは推測されるが、二四のピータを実際に回ったかどうかについては確証がなく、むしろ経典作者の理想として、名称が列挙されたと考えるのが妥当であろう。ただし、これらの二四のピータは母タントラの中ではサンヴァラ系の経典に受け継がれ、さらに整備されていく。そして、行者の身体内に「内なるピータ」を作り出し、一種の内観行法へと発展するのである。『ヘーヴァジュラ・タントラ』はその原初的な経典に位置づけられる。

2 性ヨーガと灌頂

さて、ヨーガ行者と女性たちの集会が歌舞と飲食だけではなく、性ヨーガをともなうもので

あったことは、『ヘーヴァジュラ・タントラ』の中のさまざまな箇所で言及されている。たとえば、第二儀軌第五章には、ヘーヴァジュラ・マンダラを地面に作った後で、つぎのような儀礼を行うことを説く。

マンダラの場に歓喜にあふれた八人の女性たち（vidyā 明）を招き入れる。彼女らは一二歳あるいは一六歳で、首飾りや腕輪で美しく飾られている。ヨーガ行者は彼女らを抱擁と接吻で供養する。彼は樟脳（＝精液）を口に含み、それをマンダラの上に散布する。女性たちにも飲ませれば、すみやかに彼はシッディを得る。酒や肉も摂取する。ヨーガ行者は女性たちの衣を取り去り、裸にして、女性器に何度も接吻する。彼女らはお返しに、歌を歌い、最高の踊りを舞う。ボーラ（＝男性器）とカッコーラ（＝女性器）によって、遊戯がなされる。この後、弟子の灌頂が真夜中に行われる。

この弟子に灌頂については、第一儀軌第一〇章につぎのように解説される。

マンダラが準備された後、五つの部族から選ばれた女性たち、あるいは一六歳の女性が登場する。シュクラ（白きもの）すなわち行者の精液を保つ。女性と弟子（ここでは「印女」と「方便」と呼ばれる）はいずれも目隠しをして、行者は彼女が保ったシュクラを弟子の口に投ずる。

もともと灌頂は弟子の入門儀礼として、初期密教より行われてきた重要な密教儀礼である。仏の智慧を象徴する灌頂水がそそがれることで、弟子には仏となる自覚が生じる。しかし、後

期密教ではこのような伝統的な灌頂を瓶灌頂として低位におき、秘密灌頂、般若智灌頂、第四灌頂という後続の三種の灌頂を加えた。これらは後述の四種の歓喜に対応し、さらに男女が接触する四種の方法にも対応する。すなわち、ほほえみを交わすこと、見つめ合うこと、抱擁すること、性交することで、灌頂のレベルが進むにつれて、男女の身体的な結合がエスカレートしていく。

この対応は『ヘーヴァジュラ・タントラ』第二儀軌第三章に示されているが、それに続く段落では、灌頂の具体的な方法も説かれている。概略は前述のものと同じであるが、印女の女性器から取り出された精液が弟子の口に投じられた後、弟子自身も印女と性ヨーガを実修し、阿闍梨（ヘーヴァジュラであるヨーガ行者）に対して、賛嘆の言葉を発する。この部分は般若智灌頂に相当し、その前段階は秘密灌頂にあたる。『ヘーヴァジュラ・タントラ』では第四灌頂は儀礼のプロセスとしては明確には言及されず、阿闍梨への飲食物や花、香による供養がこの後で説明される。

3 般若智灌頂と神話

弟子の入門儀礼である灌頂に性ヨーガが導入されたことについて、『ヘーヴァジュラ・タントラ』は一種の神話的なモデルがこのような儀礼の背景にあったことを示唆している。

第二儀軌第五章で、先述の灌頂を説いた少し後に、世尊がナイラートミャーの質問に答える形で、女性を引き寄せることのできるマンダラとマントラを説く。それによって、まずティローッタマーという女神がその場に引き寄せられ、さらにあらゆる女性も同様になるという。『ヘーヴァジュラ・タントラ』の中の世尊の言葉によれば、引き寄せられたティローッタマーは、金剛蔵菩薩に対して灌頂を与えることになっているが、金剛蔵菩薩は実際の儀礼では、灌頂を受ける弟子に相当し、後世のインドやチベットの注釈書によれば、女性による灌頂の授与である般若智灌頂の原型と見なされている。

ティローッタマーというのはヒンドゥー教の神話に登場する絶世の女神の名である。しかもこの女神は、二人の魔神（asura 阿修羅）によって苦しめられていた神々のために、梵天が策略を練り、巧芸神ヴィシュヴァカルマンに命じて作らせた人工の女性であった。神々の期待通り、この女神をめぐって二人の魔神は仲違いをし、たがいに殺し合うことになる。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』に説かれるマントラやマンダラは、異性の心を誘惑する敬愛法の域を出るものではないが、灌頂が性ヨーガをともなうようになる背景に、このようなヒンドゥー教の神話が意識されていたことは興味深い。すでに見たように、『ヘーヴァジュラ・タントラ』には初期密教以来の現世利益的な修法が多く見られるが、その中でも敬愛法がとくに重要な位置を占めていたことも、これに関連するのかもしれない。

六　瞑想と歓喜

1　生起次第

無上瑜伽タントラの瞑想法は、生起次第と究竟次第の二種が基本となることが多い。前者は行者が尊格を生起させ、これと合一することをめざし、後者は行者の身体内部にある脈管とチャクラなどをコントロールし、宗教的恍惚感を得る。性ヨーガをしばしばともなうことも、後者の究竟次第では一般的であるが、前者の生起次第においても、男性原理と女性原理の合一と止揚がしばしば強調されるため、メタファーとして、あるいは実際にも男女の性的合一が重要な役割を果たすことがある。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』においても生起次第と究竟次第の両者が説かれているが、はじめに登場するのは生起次第の方である。第一儀軌第三章には、ヘーヴァジュラとその眷属であるダーキニーたちが観想され、行者がそれと合一するプロセスが、順に述べられている。

行者は目の前に「ラン」(raṁ)の文字から日輪を観想し、その中心にある「フーン」(huṁ)の文字から羯磨杵を、さらに羯磨杵から金剛の囲いと網状の覆いを観想する。これらはこれから観想するヘーヴァジュラたちを包み込む結界の役割を果たす。その中にはじめに死体を観想し、行者はその上に立って「ヘールカであること」を観想する。これは、この後で実際のヘー

5　明妃を抱いて踊るヘーヴァジュラ　チベット／サムイェー寺壁画

ルカを生み出すための核のようなものである。

行者は自分の心臓に「ラン」の文字を観想し、それを日輪に変えて、さらにそこに般若と方便を自性とする「フーン」字の形をしたものを観想し、それを真っ黒で恐ろしい形の金剛杵に変える。金剛杵の中心部分にさらに「フーン」字を観想し、この「フーン」字を変化させて、「怒りを本質とするもの」とする。これが主尊であるヘーヴァジュラであるが、経典ではその名称は用いられず「金剛から生じた真っ黒いもの」などと呼ばれる。この段階では尊格の具体的なイメージは、まだ明瞭にはなっていない。これを虚空に観想した行者は、その周囲にガウリーなどの八人のダーキニーたちが、彼に対して供養していることも観想する。

ここで行者は、これらの尊格とは別のものとして、月輪と日輪を観想する。このうち月輪には「アーリ」(āli)と呼ばれるすべての母音の文字列が、日輪には「カーリ」(kāli)と呼ばれるすべての子音の文字列が、それぞれの円周に沿ってその内側に記されている。「アーリ」の「ア」は母音のはじめの文字、「カーリ」の「カ」は子音のはじめの文字からとられている。そして、これらの中央には「種子」(hūṃ)が置かれているが、これはヘーヴァジュラの種子マントラである「フーン」字であろう。

「これこそが衆生なり」と行者が発声すると、虚空のマンダラにいる者たち、すなわち八人のダーキニーと、彼女らによって囲まれた主尊は、全宇宙へと拡散していく。彼らを再び一箇

所に収斂させると、ついにヨーガ行者は「悟りを本質とするもの」すなわちヘールカそのものとなることができる。

母音と子音を連珠のように記した月輪と日輪の観想は、『大日経』などの中期密教の経典にもその原型が見られ、尊格を観想するための有効な方法のひとつであった。すべての文字が森羅万象を表し、それを支配する根本仏を、全体の中心に観想するのである。当初、これらの二群の文字は、ひとつの月輪に記されていたが、母タントラの先駆的経典である『サマーヨーガ・タントラ』では、日輪と月輪に分かれ、両者の合一が性的な合一のイメージへと変化したのである。『ヘーヴァジュラ・タントラ』の観想法も、この流れを汲むもので、ヘーヴァジュラと行者が一体となるための最後の瞬間に、それが用いられている。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』はここでようやく主尊ヘーヴァジュラの具体的なイメージを詳細に説明する。身色は青、髪の毛は黄褐色で逆立ち、五種の装身具で飾られ、一六歳の若者の肉体をもち、虎皮裙をはき、忿怒の視線を発し、金剛杵とカパーラを持物とする。八人のダーキニーに囲まれて死体の上に立つ等々である（カラー口絵3参照）。このうち、五種の装身具は大日如来などの五仏を象徴し、ヘーヴァジュラが五仏の統帥者であることを表している。

第一儀軌第三章はここで終わっているが、続く第四章もこれに連続した内容で、「自加持」の儀軌が説かれる。このような姿のヘーヴァジュラと一体となった行者は、自分の胸から光を

発し、諸仏とその配偶尊を招き寄せる。彼らに供養した後、「我に灌頂を与えたまえ」と祈願すると、実際に諸仏は五仏を象徴する五甘露で、行者であるヘーヴァジュラを灌頂する。このことを賛嘆するための散華や楽器の演奏が始まり、諸仏の配偶尊である色金剛女（しきこんごうにょ）たちによるヘーヴァジュラへの供養や、ローチャナーたちによる金剛の歌の合唱も続く。こうして、行者自身がヘーヴァジュラとして完全なものとなるのである。

尊格の観想の最後の段階で行われるこの灌頂は、生起次第によって仏と合一した行者を、諸仏が認証し、仏としての地位につけるための重要なプロセスである。「仏にするための儀礼」である灌頂を、行者は自分自身の瞑想において体験することから、「自加持」という名称が与えられているのである。

2 究竟次第

『ヘーヴァジュラ・タントラ』の第一儀軌第八章には、ヘーヴァジュラを主尊とする一五尊マンダラの観想法が説かれているが、そこでは生起次第に続いて究竟次第も実修される。

このうち、生起次第は第一儀軌第三章に類似している。虚空に女性器（bhaga）を観想し、その中央で観想を行う。まず地水火風の四大元素を観想し、二重の輪（チャクラ）をそこに生む。このうち、ひとつは八弁蓮華の形をし、もうひとつは三角形である。その中央に横たわっ

た死体を観想するが、これはヘーヴァジュラのまわりにいる一五人のヨーギニーたちの座となる。それに支えられるように、月輪と日輪を観想する。これはアーリとカーリの文字を記したものである。

両者が解け合うと、そのひとつになったところから主尊のヘーヴァジュラ（ここでは金剛薩埵と呼ばれる）が生まれる。この尊格は般若と方便を自性とするが、これらも日輪と月輪に対応している。そして日輪と月輪が再び分離していくと、そこに記された文字から、ガウリーをはじめとする一四尊のヨーギニーたちが生まれる。内側の輪に四尊、外側の輪に八尊、そして上下に二尊である。

これらの女尊たちは、一面二臂で身色は黒、忿怒の相をそなえ、五種の装身具で飾られ、赤い目をもつ。持物はカルトリとカパーラで、さらに左手にはカトヴァーンガをかかえる。腰には虎皮裙を付け、死体の上に立つ。経典ではこの後、持物などのこれらの特徴が、それぞれどのような教理的な意味をもっているかが説明される。

生起次第によって、このようにヘーヴァジュラを中心とするマンダラが完成すると、行者は究竟次第の実修へと移る。この基本となっているの「四種の歓喜（かんぎ）」の理論である。四種の歓喜とは①歓喜、②最勝歓喜、③離喜歓喜、④倶生（くしょう）歓喜で、この順に低レベルのものから高レベルへとなる。これらの歓喜を体験するために、行者は自己の「菩提心」をコントロールするので

あるが、ここでの菩提心とは「白きもの」すなわち行者自身の精液である。

精液を菩提心と見なす考え方は、『ヘーヴァジュラ・タントラ』以前の母タントラ経典にすでに見られ、ここでもそれが受け継がれている。『ヘーヴァジュラ・タントラ』では人間の身体に四つのチャクラがあり、それをつなぐ三つの脈管ララナー、ラサナー、アヴァドゥーティーがあることが、第一儀軌第一章で定義されている。

三つの脈管は、全部で三二ある脈管の主要なもので、身体の右にララナー、左にラサナー、中央にアヴァドゥーティーが走っている。残りの二九の脈管にもすべて名称が与えられていて、これらも同じ箇所で列挙されている。これらの脈管の結節点となる四つのチャクラは、上から順に、頭頂、喉、心臓、臍に位置し、いずれも蓮華の形をとるが、蓮弁の数がそれぞれ異なる。菩提心である精液がこれらを下から上に上昇すると、すでに述べた四種の歓喜が順に生ずると考えられたのである。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』の第一儀軌第八章には、究竟次第と四種の歓喜について、つぎのような記述がある。

歓喜によってある種の快楽がある。最勝歓喜はそれよりもすぐれている。離喜歓喜によって喜から離れることがあるだろう。倶生歓喜はそれらとは別である。

第一の［歓喜］は接触を求めることによる。第二は楽を求めることによる。第三は愛欲を滅することによる。第四はそれによって実修される。

最勝歓喜は生存（＝輪廻）といわれる。離喜歓喜は涅槃である。［両者の］中間は単なる歓喜である。しかし、倶生［歓喜］はそれらから離れている。

愛欲ではなく、愛欲を離れたものでもなく、［両者の］中間にも得られない。正しき真実の理解によれば、そこには般若も方便もない。

ここで示される四種の歓喜の説明からは、第四の倶生歓喜の絶対性が読みとれる。輪廻と解脱、愛欲と離欲という二項対立の中で、両者の中間に相当する単なる歓喜、ポジティヴな極にある最勝歓喜、その対極にある離喜歓喜という枠組みを作り、倶生歓喜がそのいずれをも超越した存在であると強調する。このような論法は、龍樹が空を説明するための、いわゆる四句分別を連想させる。密教においても悟りとは空を証悟することであるのは、それまでの大乗仏教と何らかわりはないが、菩提心の移動にともなう生理的な歓喜の体験を、それと同一視することに究竟次第の特色がある。

3 灌頂儀礼への組み込み

四種の歓喜の体験は、灌頂の儀礼とも結びつけられる。第一儀軌第一〇章では、すでに見たように、阿闍梨と女性パートナーによる性ヨーガによって生じた精液を、弟子の口に投ずることが説かれているが、その瞬間に弟子は、自分が認識する対象がすべて「等しきエッセンス」(samarasa 一味)となったことを悟る。

その具体的な説明として、経典の作者は、そこでは自己と他者という区別はなく、晴れわたった空のように明晰で、存在と非存在、般若と方便、愛欲と離欲といった二項対立がすべて姿を消しているという。また、すべてのものに遍満し、すべてのものに等しくなるという遍在性も強調される。そして、それを要約するように四種の歓喜に言及する。

そこでは、性ヨーガによる灌頂を受けた弟子の境地が、四種の歓喜を順に獲得し、最終的には倶生歓喜を体験することが説かれているが、さらに第二儀軌第三章では、四種の灌頂と四種の歓喜が対応することが、つぎのように明確に示されている。

> 阿闍梨、秘密、般若、そして第四［の灌頂］もまた同様に、［四種の］歓喜は順序通りに、四種の灌頂の数に応じて理解されるべし。

これらの四種の灌頂のうち、第四灌頂はもともと明確な内容が経典には説かれていなかったが、後期密教の多くの文献では、上記のような倶生歓喜を内容とすることを、阿闍梨が弟子に言葉によって説示すると説明されることが多い。本来、菩提心すなわち精液の体内での上昇によって四種の歓喜を体験することが、究竟次第の実質的な内容であったのに対し、この実修が灌頂という形式化された儀礼と結びつくことで、四種の灌頂に四種の歓喜が配分されて理解されるようになったのである。

七　おわりに

『ヘーヴァジュラ・タントラ』の内容をいくつかの項目にわけて概観した。初期や中期の密教経典にも見られるさまざまな密教儀礼から、後期密教に特徴的な性ヨーガを含む実践や、行者の身体内部の生理的技法へと、秘儀的な度合いを高める方向がそこからは読みとれる。しかし、実際の経典では、これらの儀礼が体系化されて説かれているわけではなく、未整理なまま、詰め込まれているという印象を受ける。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』は母タントラ系の密教において、最も重要な経典のひとつに

位置づけられているが、それは、この経典が母タントラの実践や教理をわかりやすくまとめているからではなく、さまざまな要素を混在させていることで、後世の経典にそれを発展させる可能性を託していたからかもしれない。

それにしても、これはいったい何という「仏教」であろう。人を殺し、その死体の肉を食べることを命じ、真夜中に女性と公然と性交し、その恍惚感を「歓喜」と呼んで、宗教的な悟りと見なす。本来、厳粛で栄誉ある入門儀礼であったはずの灌頂は、猥雑で倒錯した性の饗宴と何らかわりがない。「仏教」と呼ぶよりも「淫祠邪教」と呼ぶべき姿を、当時の人々に対しても示していたであろう。

このような特殊な仏教を説明するために「屍林（しりん）の宗教」という用語が提唱されている。もともと、インドの土着的な民族が有していた特異な宗教儀礼で、屍林すなわち墓場を舞台に、女性のパートナーとともに繰り広げられていたものを、仏教徒が導入していったという仮説である。このような実践がインドやその周辺地域でかなり広く行われていたことは、当時の断片的な記録や、現在でもその残滓が見られることから、おそらくたしかであろう。南アジアに限らず、北アジアのシャーマニズムや、ヨーロッパ世界の魔女とサバトなど、ユーラシア大陸の各地で、その類例を見ることができる。しかし、当時の仏教徒たちが、いかなる理由で、そして、どのようなプロセスでそれを取り入れていったのかは、ほとんど明らかにされていない。

もちろん、仏教徒は何の抵抗もなく、このような実践をみずからのものとはしていない。すでに見たように、慈悲、空、如来蔵などの枠組みは、実際の行為のもつ過激さをいくらかでも和らげる効果があったであろう。性ヨーガも男性原理を方便、女性原理を般若と同一視することで、悟りとは両者の合一であるという論理を可能にした。

このような教理的な説明は、ヘーヴァジュラのもつ身体特徴にまでおよび、一六本の腕は一六種の空、四本の足は四種の魔を破すことで、八面は八解脱門を表す等の解釈が、経典に説かれている。しかし、これらはあくまでも、実際のヘーヴァジュラの姿に対して与えられた、いわばこじつけの説明であり、一六種の空などを表現するために、このような身体的な特徴が生み出されたわけではない。それは、性ヨーガについても同様で、般若と方便の合一を体験するために、性交がどうしても必要であったとはとうてい思えない。

性ヨーガを含む特異な実践体系が、仏教の存在基盤ともいうべき戒律とまっこうから対立することは、誰の目にも明らかである。それをあえて導入したのであるとすれば、それだけの理由があったはずである。

当時の仏教徒が、伝統的な実践だけでは打破できないような閉塞状況にあったのか、あるいは、インドを席巻したタントリズムの潮流に仏教も抗しえず、のみこまれてしまったのか、あるいは、信者たちを次第にヒンドゥー教に奪われつつあった仏教が、あらたな信徒層獲得のた

めに、土着的な民族に教化の対象を広げるための戦略であったのか等々、その解明は今後の研究にゆだねるしかない。

参考文献

Snellgrove, D. L., *The Hevajra Tantra: A Critical Study*, 2 parts. London: Oxford University Press, 1959.

Farrow, G. W. & I. Menon, *The Concealed Essence of the Hevajra Tantra*. Delhi: Motilal, 1992.

Nihom, M., On Attracting Women and Tantric Initiation: Tilottama and Hevajratantra, II, v. 38-74 and I, vii. 8-9. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 58（3）: 521-521, 1995.

インド後期密教〔下〕　般若・母タントラ系の密教

2006年1月25日　第1刷発行

編著者　松長有慶
発行者　神田　明
発行所　株式会社 春秋社
〒101-0021　東京都千代田区外神田2-18-6
電話　03-3255-9611（営業）
03-3255-9614（編集）
振替　00180-6-24861
http://www.shunjusha.co.jp/
装幀者　大友　洋
印刷・製本　萩原印刷株式会社

© 2006 Printed in Japan
ISBN4-393-11235-0　定価はカバー等に表示してあります